『Silence or Sweety?』

綺麗な場所だった。
そこは社内のPR番組を撮影するためのスタジオで、この場にアイドルとして立ったことも一回や二回ではない。

――――なら、なぜここでこのような痴態を繰り広げているのか。

「くふぅぅぅ!?だ、ダメ、今でたばかりで…!!!」
「はっ、はっ…まだです…もっと追い詰めてあげます…!」
「そ、そんな好き放題…!!!」
「ひぅ!?…イきなさい…!!!」

照明の熱が素肌を焼くほどに熱い。
その光の下で、白雪千夜と真鍋いつきは互いの陰部から伸びた逸物をしごきあっていた。
ふたなりサキュバス。そんな意味不明な存在に彼女たちが変化してしまってから時間が経過し、社内に取り残された多くのアイドルたちが脱落していった。
だから今イき残っているのはみな優れた性的巧者であり…

「そんな、ダメ…またイっちゃ…ふぁぁぁぁぁ！？」
「くっ、こちらも…くぅぅぅぅぅ！！！！」

互いにほぼ同時に達し、白濁した体液を互いの肢体にぶちまけ合う。その回数が多いほど精力と魔力を失い、最終的に他者の支配を受けるほどに弱体化する。
荒い呼吸を繰り返して息を整えているその瞬間、いつきの目が一瞬光を失って身体の重心を失う。度重なる射精に疲労したその間隙を千夜が見逃すはずもなく、彼女はスタジオの床にいつきを押し倒した。

「あ、しまった！こんな…うぅ、でも！」
「おとなしく覚悟を決めてください、ほらっ」
「いや、そんな…入って来るぅぅぅ！」

身長がやや小さい千夜がいつきの両肩を押さえつけて犯す。もがいて逃れようとするいつきだが、上から乱暴にピストン運動を繰り返されて、そのたびに身体がわなないてしまうのでうまく行かないようだ。
玉のような汗がとびちり、ともすれば虚弱な印象を与える千夜の肉体が健康的ないつきの肉体を蹂躙しているのは背徳的な光景だ。
いつきも挿入にあわせて締め付け返しているのだが、何分主導権を握っているのが千夜だ。彼女のペニスに対して有効な刺激を与えられていない。

「ひぅぅぅう、ああ、そこ…や、やめ…んぅぅぅぅっ！！！」
「ここですか？ここをもっと攻めれば良いのですね？」
「ひぃぃぃぃ、ダメ、ダメなのぉぉぉ…！」

いつきの反応に勝利を確信した千夜は薄い笑みを浮かべ、浅い位置の膣壁を攻め立てる。
女性同士ゆえに膣内にある良いところも悪いところも手に取るように分かる。性感帯をピンポイントで突かれてはたまらないらしく、いつきは目を白黒させながら、それでも懸命に逃れようと手足を動かしていた。
そんな抵抗を嘲笑うかのように、千夜は彼女の胸板に指を這わせる。そうして小さな二つの飾りにたどり着くとやや強めに親指と人差し指の間全体で捏ねくり始めた。

「ふぁぁ！？ち、千夜ちゃん！胸ぇ、乳首はだめ、だめですぅう！！」
「そうですか……ならこういうのはどうでしょうか？」

さらに攻め手を強める千夜。もう一方の手は下乳を持ち上げるようにして固定し、自身の逸物へより強く押し付けた。亀頭からあふれ出る我慢汁といつきの愛液が混じり合い潤滑油となって滑りを良くする。
この上なく淫らな音がスタジオの中に響き渡り、その音を聞かされるたびにいつきは顔を真っ赤に染め上げた。

「や、やめ……ひぅぅっ！千夜ちゃん、お願……うっひゃぅん！？」

「やめません、貴方が屈服するまで」
「や、だめ、もうイく、イっちゃ……っ！？うぐぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

何度目かの絶頂。だが千夜はいつきを休ませるつもりはないようだった。それどころか、さらに強く激しく腰を打ち付け始める。

「んひぃぃぃぃぃぃ！！また、またイってるのにぃぃぃぃ！！」
「休む暇なんてあげません！このまま満足いくまで何度でもイってください！！」
「千夜ちゃ……んぅぅぅ！で、でもまだ……！！！」
「えっ！？」
「私だって…負けるわけ…には！」
「な、まだあなた動けて…くぅッ！？」

油断は敗北への直通路。
両肩の拘束がゆるんだことに気づいたいつきは、死力を尽くして千夜と身体を入れ替えると、その上に馬乗りになった。
「今おちんちんを入れちゃうと私が自滅しちゃうかもしれない…でも、私のおまんこなら、千夜ちゃんを上から制圧できる！」

「ふぁぁぁ、そ、そんなことさせるもの…ですか！くふぅぅぅっ！」
「ほら、千夜ちゃんのおまんこだって私を感じてる！気持ちいいんでしょ、本当は屈服したいんじゃないの！？」
いつきの逆襲が始まる。身体を少し倒しながら膣内で亀頭をねじるように押し付ける。すると千夜はのけぞりながら悶絶した。
「ちが……違うぅぅぅぅう！！き、気持ちよくなんか……ひぅ！ああん、そこダメぇぇぇぇぇ！」
「うぅぅぅ、攻めてるはずなのに……私もこれぇ気持ちいいよぉぉぉぉ！！」
「しかし下から突き上げれば…！くぁぁぁぁぁン！？」
「させない、無様にイっちゃって…！ほらほらぁ！！！」
「んひぃぃぃぃぃ、こ、こんなのぉぉぉ！！！」
激しく腰を振り、喘ぎ声を上げながらも攻め手を休めない二人。どちらも限界が近いのか、お互いの絶頂は秒読みだ。
千夜もいつきも最後の一撃を繰り出すため、よりいっそう激しく腰を振ると――
「イくわけ…あぁぁぁ……千夜ちゃん！だめ、千夜ちゃんだけイって…ふぁぁぁぁ！！！」
「ふぅぅぅ、イって！イって……あなたが、早く…んひゃぁぁぁぁ！？」

盛大に潮を吹きながらいつきは身体を痙攣させる。それに伴って彼女の膣内が激しく収縮し、千夜のものから精を吸いあげようとするが、それ以上の精の奔流に揺さぶられ、ガクガクと身体を震わせた後、千夜の上へと崩れ落ちた。

「ハァッ、ハァッ、ふぅ……ふぅっ…」

――――危なかった。

あの状態から逆転されて主導権を握り返されるとは、相手の持久力がもう少しあったら負けていたかもしれない。

そんな冷や汗をかきながら、千夜は真鍋いつきの下から身を起こした。こうなって脱力した相手は本来重くて持ち運べるはずもないが、ふたなりサキュバスという存在になってからは身体能力も向上しているらしい。

「……ん。さて、彼女を預けに向かいますか」

「ただいま戻りました」
「おかえり千夜ちゃん、今日もお疲れ様」
「おかえりなさい。かなりの激闘だったようだね」

拠点としている社員食堂に戻ると、いつものコーヒー豆の香り、そして主の声。そう、千夜は主である黒崎ちとせの庇護を約束した東郷あいと共に行動をしていた。

「ええ…やはり精神的な強さというものを強く感じます。ここまで『性存』してきた方といいますか…」
「でも最終的に千夜ちゃんが勝ったんでしょう？」
「それはもちろんです」
「さっすが、ウチの自慢の子だわ～」

いいながらちとせが千夜の頭をなでる。気恥ずかしさもあるが、うれしさもあるその行為への反応に困りながら千夜は小さく頭を下げた。

そうして食堂のカウンターに腰かけるよう促されて従うと、その前に東郷あいがコーヒーを差し出してきた。

一晩かけて抽出したという水出しのコーヒーを喉に流し込むと、苦みと香りが一気に広がって先ほどまでの性交でかかった頭のもやがパッと晴れるような気がしてくる。その感触に心地よさを覚えていると、今の状況が出かけてくる前と若干変化していることに気が付いた。

「ひょっとして…また、誰か来たのですか？」
「ああ、大沼くるみ君がね。完全に理性を焼失してしまっていたが…まぁ、気絶させて川島さんのところに届けておいたよ」

ふたなりサキュバスと化したアイドルの中には、その性欲に暴走して性獣と化してしまった子もいる。そういう者の数はだいぶ減ったが、それだけにひとりひとりは強力なはずだ。

「なるほど…それで瑞樹さんは『今日は大漁ねえ』と苦笑していたのですね」
「そうかもしれないね、彼女にお世話になりっぱなしだから…とりあえずこの騒動が終わったら何かお礼をせねばならないね」

川島瑞樹はこの混乱の中で完全な中立を保っている。
それどころか力を失ったふたなりサキュバスたちのシェルターを自認しており、多くのアイドルたちがイき倒したアイドルを彼女に預けていた。

「しかしこれで7人目、ですか。ありがとうございます」
「構わないよ。引き受けたことをやる、それだけさ」

涼しい顔でほほ笑むこのロードクラスのふたなりサキュバスが、なぜ自分の願いを叶えてくれているのかは分

からない。しかし黒崎ちとせという主を守るためには自分はどう考えても実力不足であり、誰かに頼らざるを得なかった。

「ああ、私はふたりに守られるお姫様なのね。よよよ…」
「お嬢様…」
「分かってる。千夜ちゃんとあいさんのおかげでこんなに平穏に暮らせてる。それには感謝してるのよ」

でも無力感はあるのよねと視線を下げるちとせに対して、千夜はかける言葉がない。困ったように視線を向けるだけだが、そこにあいが助け舟を出してくれる。

「そういえば、もうひとりの客人については話さなくて良いのかい？」
「え？」
「そうそう、すっかり忘れてたわ。一番大事なことなのに」
「お嬢様？」
「もー、そんなに睨まないでよ。ちょっと果たし状受け取っただけなんだから」

『果たし状』といういかめしい単語とは裏腹に、ちとせが取り出した封筒はピンク色のかわいらしいもの。その表面に「白雪千夜ちゃん江♡」とデコりにデコり散らかした文字で書かれており、差出人はすぐに察することができた。

「佐藤心さん、ですか…」
「そーそー、だいぶお冠だったわよぉ？」
「はぁ…一体彼女と私になんの関係があると…」

困惑しながら封筒を開くと

『押忍☆千夜ちゃんよ！
みんなのふたなりアイドル、シュガシュガスウィート☆しゅがーはぁとだぞ！
あのさー、人がマリナルからトレーニングつけてやれって頼まれたいつきっちをイかせ倒すだなんてなんてことしてくれたんだッ☆おい♪
こっちのコケンがかかわってるんだわ☆そこんとこ、ヨロシクしたいわけ☆わかる？わかれよ♪
つきましては明日、第三収録室まで来いってワケ☆待ってるからな☆』

「……なんですかこれ」
「さあ？」
「彼女らしいとは思うけどね」
「はぁ…分かりました。やってみましょう、降りかかる火の粉は払うのみです」

千夜は小さくうなずくと、その胸に闘志を燃やすのだった。

指定された第三収録室は普段はギターやドラムセットの並ぶ、バンドスタイルで録音ができるスタジオだった。スタジオの隅っこには申し訳程度にソファがあって腰かけることができるが、寝るには向いていない。あんなところでどうやってセックスをするのだろうと考えたが、昨日の撮影スタジオも大差ないかと思い直し、その扉を開いた。

「来ましたよ。心さん」

そう声をかけるが、部屋の隅にギターなどが並べられているだけで、心の姿は見えない。どういうことだろうと辺りを見渡そうとすると…

「い・き・な・り、スウィティー☆」

どんっ、と後ろから押されて、床に倒れ込む。音が出ないようにチップクッションが敷き詰められた床は硬くはないが、倒されれば痛い。

怒りの感情そのままに振り返り

「何を…！」

と言いかけて思わず言葉を止めてしまう。
目の前にはエナメル性のルージュなボンテージ、そしてそそり立つ巨大なペニスが突き出されていた。
「ふふ～ん、驚いたか？驚いたろ、はぁとのつよつよチンポ！」
巨大なだけではない。その質感を強調するようにペニスにはリングとベルトが巻かれており、今からこの欲望をお前にぶつけてやるとはっきり示されていた。
「おらっ、脱げよ♪しゅがしゅがスウィート☆」
「くぅ！？」
急に心の手が光ったと思ったら、自分の服がすべて消えてしまう。ふたなりサキュバスとして経験を積んだ存在は様々な異能が使えるというが、そのひとつだろうか。
「ほらほらぁ…よく見ろって☆千夜ちゃんのリトルちんちんとは違うつよつよチンポを☆こっからカリ首がのびてて～、キュッてしまってボンって出てる！う～ん、スウィーティー♪」
「な、何なんですかあなたは！？出会いがしらに押し倒してきたと思えば、ひとにペニスを押し付けて来て！」
「う～ん？別にぃ、はぁとは、千夜ちゃんにぃ、いつきっちをやられた恨みがあるから、ここでたっぷり犯してあげようって思って☆その、処刑宣告？」

何か言い返してやろうと思うが、眼前に巨大なペニスを突き出されると言葉が出てこない。ふたなりサキュバスとしての本能がそこにくぎ付けになってしまう。

「だってさ、分かるっしょ？はぁとと、千夜ちゃんの格の違いが☆ふたなり同士、つよつよとクソ雑魚の差ってさ、ちんぽに出てると思わない？」

確かに千夜のペニスは隆々たるものではない。硬度には自信があるが、いきなり子宮を貫いて相手を失神させる、といった強引な手段は取れないのが現実だった。

しかし今突きつけられているペニスはどうだろう。これほど力強く、エネルギッシュなペニスであれば女も、ふたなりサキュバスも容易く屈服させることが可能なのではないか。

――――つまり、自分はこの相手に勝てるのだろうか？

「つーわけで、ちょっとちんちん貸せ～？」

再び心の手が怪しく光りだす。思わず身構えようとするが、一体何を気を付ければ良いのかすらわからない。

「な、何をする気…ハッいつの間に！？」

「脱がせられるんだから、着けるのも簡単ってワケよ☆どうだ？すごいか？すごいだろ？すごいって言えよ☆」

千夜が股間に違和感を覚えて陰部を見ると、いつの間にかそこにペニスケースに紐だけがついたようなパンツが装着されていた。

「こ、このような辱めを…！」

「良いから良いから、こっからもっと恥ずかしい目にあうんだからさ～♪」

そう言いながら千夜を四つん這いにさせると、心はペニスを後方へと強引に持ち上げる。

「痛ッ！？」

「へへーん、痛いだろ？でもこれがクセになってくるんだなぁ…ほれほれぇ♪」

「くあぁぁぁ！？うぅぅぅぅ…」

「もうおっきくなってきてんじゃん。それでも全然ちっちゃいけどさ。ええんか？これがええんか？うふん♪」

大きくなった千夜のふたなりペニスが紐パンの中で窮屈そうに悲鳴をあげる。そこを心にしごかれると、痛みと快感で未知の感覚に翻弄されてしまう。

「うぁぁ！？ふぐぅ！あっ……はぁ……！」

「おっきくなったらもっと気持ちよくなるって、もう千夜ちゃんも分かってるよなぁ☆」

明らかに挑発されて、千夜の心に闘志が燃える。心の言う通り、段々と気持ちよくなってきているのも事実なのだ。だがこのままやられるわけにはいかないと必死に抵抗を続ける。

「なんだ〜？反抗的な目だな☆はぁとが直々に指導してやるよ」

心は四つん這いになった千夜のパンツをずらすと、後ろの穴を指でなぞり始める。

「な、何をするつもりですか！？」

「決まってるだろ☆千夜ちゃんみたいなクソ雑魚アナルにはぁとの指を突っ込むんだよ☆」

そう言うと心は自分の手を千夜のアナルへと押し当てた。さすがにここまでされては千夜も相手が何をしようとしているのか悟ってしまう。

「ま、待て！やめ…！」

「はい待ちませーん♪」

ずぶり、と無慈悲な音を立てて千夜のアナルに心が人差し指を突き刺す。その痛みは想像を絶するものだったが、ふたなりサキュバスとして覚醒した千夜の体はどんな痛みでも快感へと変えてしまうのだ。

「んぎぃ！？いぎゃっ！ああ……あぁ！」
「おっほ、さすがぁ♪クソ雑魚アナルのくせに締まりも感度も最高じゃん？こりゃ後ではぁとのつよつよチンポ、ぶち込んであげなきゃな～☆でもまずは一発だしとけ～？」
「ひぎぅ！？あぁぁぁぁ！？」

心の指、その二本目が千夜のアナルへと突き入れられる。前と後ろから激しい快感に襲われ、千夜は嬌声とも悲鳴とも取れる声をあげながら悶える。

「あっはぁ☆さすがにきっついなぁ……でも段々柔らかくなっていってるかも？ほらぁ♪これ分かる～？」

そう言いながら心は指でさするのではなく、ぐりぐりと押し付けるように動かす。もう片方の手で千夜のペニスのカリ首を巧みにしごき上げるのだ。

「あぎっ！ひぐぅ！おぁっ、あぁぁ！」
「ほらほら、声我慢しないとぉ♪おちんぽ挿入以前に屈服しちゃったふたなりアナルでーすってばれちゃうぞ～☆」

心の指の動きが激しくなり、千夜を攻め立てる。そのたびに千夜は体をのけぞらせ喘ぎ声をあげてしまう。